第５９回日本薬剤師会学術大会

「一般演題優秀賞」選考結果

令和８年１０月１３日
公益社団法人日本薬剤師会

本会では、薬剤師の調査・研究活動への意識向上並びに調査・研究内容のさらなる質の向上に資することを目的に、第４８回日本薬剤師会学術大会（鹿児島大会）より 、ポスター優秀賞を創設しています。

創設から１０年を迎えるにあたり、研究発表の一層の質的向上および学術的意欲の喚起を図るため、第５９回日本薬剤師会学術大会（新潟大会）より、口頭発表を新たに優秀賞の選考対象に加えることとしました。

第５９回大会（令和８年１０月１１日・１２日、於：新潟県新潟市）においては、一般演題優秀賞審査委員会により、学術性、新規性、将来性、医療等への貢献等、総合的な観点から審査を行い、下記の通り、最優秀賞１題、優秀賞５題が選考されましたので、ここに発表いたします。

記

【最優秀賞】（１題）

演題番号：ＯＳ－０２－２
演 題 名：地域薬局における家庭用心電計を用いた心房細動早期発見の取り組み
発 表 者：○中村　智海[1,2][福岡県]、 中島　崇之[2]、清水　敦[2]、小庄　修明[2]、
首藤　英樹[1]、山本　和宏[2]、岡崎　光洋[3]、大光　正男[1]
所　　属：1 第一薬科大学大学院薬学研究科、2 福岡市南区薬剤師会、3 秋田大学医学部附属病院 医療 DX センター 遠隔医療推進部門
抄　　録：

【背景】

心房細動（atrial fibrillation：AF）は心原性脳梗塞の主要な原因であり、発症すると重篤な後遺症や生命予後の悪化に直結することが知られている。一方で、AF は無症候性のまま経過する症例も多く、医療機関を受診しないまま見逃されるケースが少なくない。そのため、地域レベルでの早期発見体制の構築が重要である。年、家庭用心電計の普及により簡便な自己測定が可能となっており、身近な医療資源である地域薬局は、AF の早期発見および健康教育の拠点として新たな役割を担うことが期待されている。

【目的】

地域薬局における家庭用心電計を用いた薬剤師主導の AF 早期発見の取り組みの有用性と、地域住民の病識および健康行動への影響を検証することを目的とした。

【方法】

福岡市南区の 27 薬局において、40 歳以上かつ定期的に内科受診をしていない地域住民を対象とした前向き研究を実施した。参加者は家庭用心電計を用いて自己測定を行い、その結果に基づき薬剤師が AF および脳卒中予防に関する説明、ならびに健診・医療機関受診の勧奨を実施した。測定は 3 か月以上の間隔をあけて 2 回実施した。知識および意識の変化については、測定前、1 回目測定後、2 回目測定後の 3 時点で質問票により評価し、Friedman 検定および Wilcoxon 符号付き順位検定(Bonferroni 補正)を用いて統計解析を行った。

【結果】

1 回目測定には 332 名が参加し、7 名に AF の可能性が示唆された。対象者の 78.0%は無症候であり、自覚症状の有無にかかわらず AF の可能性を確認することの重要性が示された。知識および意識スコアはいずれも 3 時点で有意な改善を認め、特に測定前と 1 回目測定後の間で顕著な向上が確認された。一方、1 回目測定後と 2 回目測定後の間では有意差は限定的であった。また、1 回測定群と 2 回測定群の比較では、AF 検出率に有意差は認められなかったが、検出件数は 2 回測定群で多い傾向を示した。

【結論】

地域薬局における家庭用心電計を用いた薬剤師主導の介入は、無症候性 AF の早期発見および地域住民の病識向上に寄与する可能性が示唆された。特に初回介入による教育効果は大きく、薬局を活用した継続的な健康支援の有用性が示された。一方で、反復測定による追加的効果は限定的であり、その実施方法や対象者の選定、介入頻度および継続的なフォローアップ体制については、今後さらなる検討が必要である。

【キーワード】

心房細動、地域薬局、早期発見、心電計測定

【優秀賞】（５題）

（演題番号順）

演題番号：ＯＳ－０１－１

演 題 名：微量血液による腎機能迅速評価法を用いた保険薬局におけるバラシクロビル投与量調整の有用性および安全性の検討

発 表 者：○近藤　悠希[1][熊本県]、 稲葉　一郎[2]、徳山　智治[3]、影下　登志郎[4]、近藤　智子[5]、今井　輝子[2]、入江　徹美[6]、石塚　洋一[1]

所　　属：1 熊本大学 大学院生命科学研究部 臨床薬理学分野、2 薬局セントラルファーマシー長嶺、3 託麻中央薬局、4 影下皮膚科クリニック、5 鹿児島大学 ヒトレトロウイルス学共同研究センター、6 熊本大学 大学院生命科学研究部 医薬品包装学寄附講座

抄　　録：

【目的】

腎排泄型薬剤は、過量投与による有害反応を回避するために腎機能に応じた適切な投与量調整が不可欠である。しかし保険薬局では血清クレアチニン値（SCr）を取得できない場合が多く、処方監査が十分に実施できない現状がある。また、小規模診療所では臨床検査を自施設で実施できず、処方時点で腎機能が把握できない場合も少なくない。抗ヘルペスウイルス薬バラシクロビル（VACV）は代表的な腎排泄型薬剤であり、過量投与により急性腎障害などを引き起こすことが知られている。現在でも年間 100 件以上の VACV 関連腎障害が報告されており、過量投与対策が急務である。そこで本研究では、微量血液を用いた臨床現場即時検査（POCT）による腎機能迅速評価を活用した薬局における VACV の投与量調整の有用性および安全性を検証した。

【方法】

VACV が処方された 65 歳以上の帯状疱疹患者のうち、同意が得られた 100 名を対象とした。薬局にて自己穿刺により採取した微量血液から測定した SCr を用いて推算糸球体濾過量（eGFR, mL/min）を算出し、eGFR に基づき VACV の投与量を設定した。POCT の有用性は、外部委託検査に基づく eGFR と比較し、両者の eGFR 値の乖離およびそれに基づく推奨投与量の差異を指標として評価した。安全性は、VACV 投与期間終了後に聞き取り調査を実施し、有害事象の発現状況を検討した。

【結果】

POCT により算出した eGFR は外注検査に比べ平均 4.34 mL/min 低値を示した。Bland-Altman 分析では、腎機能障害に該当する eGFR 60mL/min 以下では両者は比較的一致したが、正常域に近づくほど乖離が大きい傾向を認めた。外部委託検査により後に減量が必要と判明した 28 例のうち 26 例では、POCT により適切な減量が行われており、過量投与となる症例は 2 例にとどまった。一方、eGFR を過小評価する POCT の傾向から 19 例で外注検査より低用量が選択された。聞き取り調査で 3 例の有害事象を認めたが、いずれも投与量との関連は認められなかった。

【考察】

POCT は腎機能をやや低く見積もる傾向があるが、VACV の減量が必要な患者を適切に抽出し、過量投与回避に寄与することが示唆された。一部で過小投与の可能性が示唆されたが、外部委託検査に基づき用量調整が行われたため、臨床的影響は限定的であった。以上より、本手法は保険薬局における腎排泄型薬剤の安全な使用に有用と考えられた。

【キーワード】

腎機能評価、臨床現場即時検査、腎排泄型薬剤、バラシクロビル

演題番号：ＰＳ－００１

演 題 名：学校におけるミスト発生装置の維持管理に関する介入評価　一般細菌検査導入による衛生管理行動への影響

発 表 者：○望月　祐子[岐阜県]、 長井　章[1]、小池　紫[1]、山田　雅英[1]、北原　敏[1]、杉浦　智彦[1]、永瀬　久光[1]

所　　属：1 岐阜市学校薬剤師会

抄　　録：

【目的】

近年、猛暑対策として学校に導入されているミスト発生装置は、配管内の微生物汚染リスクが指摘されている。岐阜市学校薬剤師会は、維持管理マニュアルの作成および教育委員会と連携した一般細菌検査の導入を行った。本研究は、これらの介入がミスト発生装置の衛生状態の把握および現場の衛生管理行動に与えた影響を検討することを目的とした。

【方法】

2024～2025 年度にミスト設置校を対象とし、1,一般細菌、残留塩素、水温、気温の測定、2,養護教諭への運用実態および意識調査、3,一般細菌数高値検出事例における対応状況の解析を実施した。アンケートでは、管理状況および検査導入による衛生管理意識や対応の変化を評価した。アンケートは養護教諭を対象に実施し、回答をもって研究参加への同意を得た。学校名を収集したが、結果の集計および公表にあたっては個人および施設が特定されないよう配慮した。

【結果】

一般細菌数の中央値はいずれの年度も 0 CFU/mL であったが、最大値は 200,000 CFU/mL と高値の事例を認めた。環境因子（残留塩素、水温、気温）と細菌検出の間に有意差は認められなかった。一方、シーズン前消毒実施校では本調査時点で一般細菌は検出されなかった。アンケートでは、一般細菌検査の実施が衛生管理意識や取り組みの向上に寄与するとする回答がみられた。特に高値検出校（10 CFU/mL 以上）では肯定回答率は 100%であった。ケース解析では、長距離配管や水の滞留構造など、汚染要因と考えられる構造的特徴がみられ、装置交換や使用中止といった対応が実施された。

【考察】

本研究の結果、学校におけるミスト発生装置の汚染防止には、残留塩素濃度等の環境因子の維持のみでは不十分であり、初期消毒および配管構造の適正化が重要であることが示唆された。さらに、一般細菌検査による客観的指標の提示は、リスクの可視化を通じて衛生管理への関心を高め、管理行動の変容につながる可能性がある。また、安価で網羅性の高い一般細菌検査をスクリーニングとして活用することで、導入可能な持続性の高い管理体制の構築に寄与した。以上より、本取り組みは学校薬剤師が主導し行政と連携して実装した、学校環境衛生における実践的かつ再現性の高いモデルであり、今後は統一的な指針に基づく衛生管理の標準化に向けた検討が望まれる。

【キーワード】

ミスト発生装置　学校　衛生管理　一般細菌検査　行動変容

演題番号：ＰＳ－００４

演 題 名：在宅療養患者における OTC 医薬品使用の実態と適正使用に向けた薬学的課題

発 表 者：○島田　顕[1][神奈川県]，鈴木　伸悟[1]、湊谷　伯[2]、富田　真吾[3]、
中村　洋明[3]、小林　弘忠[3]、田坂　祐一[2]

所　　属：1 ガーデン薬局、2 就実大学薬学部 臨床薬学研究室、3 株式会社メディカルガーデン

抄　　録：

【目的】

セルフメディケーションの推進が求められる中、在宅療養患者においても OTC 医薬品の使用が想定される。しかし、在宅医療では処方薬による薬物療法が中心であり、OTC 医薬品使用の実態やその適正性については十分に明らかになっておらず、処方薬との重複使用や患者の状態に応じた不適切使用も懸念される。そこで本研究では、在宅療養患者における OTC 医薬品の使用実態および薬学的課題について明らかにし、OTC 医薬品を含めた薬学的管理の必要性について検討することを目的とした。

【方法】

対象は、ガーデン薬局の社内研修を受講した薬剤師が 2025 年 10 月 1 日～31 日までの 1 か月間に担当した 18 歳以上の在宅療養患者とした。本研究では、訪問薬剤管理指導時に収集された情報（訪問場所、性別、年齢、使用 OTC 医薬品および処方薬、OTC 医薬品入手経路、薬学的介入およびアウトカム）を後方視的に解析した。なお、本研究は就実大学教育・研究倫理安全委員会の承認を得て実施した。

【結果】

対象患者は 531 例であり、施設在宅 410 例、個人在宅 121 例であった。そのうち OTC 医薬品使用患者は 37 例（7.0%）であり、施設在宅 21 例（5.1%）、個人在宅 16 例（13.2%）であった。OTC 医薬品使用患者のうち薬学的介入を要した症例は 23 例（62.2%）であり、施設在宅 14 例（66.7%）、個人在宅 9 例（56.3%）であった。介入を要した理由は、処方薬との重複（下剤、胃腸薬、鎮痛薬）、高齢者での抗コリン薬使用、腎機能低下患者のアルミニウム含有医薬品使用などであった。また、具体的な介入として、処方薬との併用や長期連用を避けるための指導、服用前の主治医への相談などが行われ、介入症例の 39.1%で使用中止、8.7%で処方薬への切り替えが実施され、その他の症例でも用法を頓服に変更するなどの適正化が実施された。

【考察】

本研究により、施設在宅・個人在宅のいずれにおいても OTC 医薬品の使用が認められ、添付文書上の「してはいけないこと」や「相談すること」に該当する使用例が存在することが明らかとなった。また、OTC 医薬品は、医療用医薬品にはない成分が配合される商品もあり、患者の症状緩和などに貢献しうる一方、適正使用上の課題を有する例もみられた。以上より、在宅療養患者においても、OTC 医薬品を含めた継続的な薬学的評価と介入が重要であると考えられた。

【キーワード】

OTC 医薬品、セルフメディケーション、在宅医療

演題番号：ＰＳ－００７

演 題 名：「心不全シール」を用いた患者啓発と薬局薬剤師への情報共有に関する実証研究結果

発 表 者：○清水　真由子[1][新潟県]、宮川　哲也[1]、小林　賢司[1]、高橋　由紀子[1]、相澤　宗一郎[1]、武藤　浩司[1]、長谷川　明人[1]、佐藤　央記[1]、高山　亜美[3]、猪又　孝元[2]、荻野　構一[1]

所　　属：1 公益社団法人新潟県薬剤師会、2 新潟大学大学院 医歯学総合研究科、3 新潟大学医歯学総合病院

抄　　録：

【目的】

心不全は進行性疾患であり、早期段階では自覚症状が乏しく、患者自身が疾患を十分認識していない場合がある。また、心不全治療薬には高血圧、糖尿病、虚血性心疾患など他疾患にも適応を有する薬剤が多く、処方薬のみから患者が心不全であることを把握することは必ずしも容易ではない。このため薬局薬剤師が心不全患者であることを認識できず、適切な服薬指導や生活支援につながらない可能性がある。本研究では、医師が「心不全シール」をお薬手帳に貼付することにより、患者の疾患理解および薬剤師の疾患認識に与える影響を検証した。

【方法】

新潟県内の医療機関および保険薬局の協力のもと観察研究を実施した。2025 年 12 月から 2026 年２月までの約３か月、協力医師が診療時に心不全患者（ステージＢ～Ｄ）のお薬手帳へ「心不全シール」を貼付し、患者へ説明を行った。薬局では薬剤師がシールを確認し、服薬指導時に患者および薬剤師アンケートを実施した。

【結果】

シール貼付数に対する患者アンケート及び薬剤師アンケートの回収率は 40.2%であった。患者 538 例の回答では、自身が心不全と診断されていることを認識していた患者は 77.9%であった。薬物治療の重要性を認識していた患者は 93.5%であり、シールにより薬の重要性を改めて実感したと回答した患者は 70.6%であった。シールに対して不安や抵抗を感じた患者は 8.6%にとどまった。患者と薬剤師の心不全認識の一致率は 77.4%であり、κ 係数は 0.44 で中等度の一致を示した。薬剤師アンケート（531 例）では、シールを契機に服薬指導を強化したと回答した症例が 24.5%であった。さらに、心不全の事前認識の有無と服薬指導内容との関連を検討したところ、有意な関連が認められた（χ^2 検定、$p<0.001$）。

【考察】

本研究を通じて「心不全シール」をお薬手帳に貼付することで、患者の疾患理解および薬局薬剤師による患者の病態認識に一定の効果が認められた。心不全シールにより約７割の患者が薬物治療の重要性を再認識しており、視覚的ツールを用いた啓発が患者教育を補完する手段として有用であると考えられた。また、薬剤師が心不全を十分把握できていない症例も一定数認められ、シールによる情報提示は薬局における疾患認識および服薬指導の充実に寄与する可能性が示された。

【キーワード】

心不全シール、患者の診断認識、薬剤師の患者の疾患認識、服薬指導の充実

演題番号：ＰＳ－００９

演 題 名：薬局薬剤師によるCYP2C19遺伝子型情報を活用した介入の影響：クロピドグレル服用外来患者を対象としたパイロットスタディ

発 表 者：○黒田　綾[1][東京都]、田島　正教[1]、齊藤　清美[1]、加藤　肇[2]、荻野　哲也[3]、浅川　正幸[4]、城　一秀[5]、吉村　一哉[5]、杉山　恵理花[1]

所　　属：1 昭和医科大学 大学院薬学研究科 薬物動態学分野、2 薬局しなやく、3 南大井薬局、4 青横ファーマシー、5 健康サロン

抄　　録：

【背景・目的】

薬物代謝酵素の遺伝子多型に応じた薬剤調整により副作用軽減や治療効果の向上が期待される．本邦で保険調剤薬局における薬理遺伝学情報の活用は未だ普及していない．本研究は外来基盤の薬局で薬物代謝酵素の遺伝子型情報の活用可能性に焦点を当てた．臨床的知見が蓄積されている抗血小板薬クロピドグレルを例に主な代謝酵素であるCYP2C19遺伝子型情報を活用した薬局薬剤師による介入とその影響を検証するパイロットスタディを試みた．薬局薬剤師介入前後の患者の生活習慣の意識やアドヒアランスの変化，遺伝子検査への意識について調査した．

【方法】

クロピドグレルを服用中の外来患者 15 名を対象とした．薬局で唾液を採取し，CYP2C19 遺伝子検査を実施した．得られた遺伝子型はトレーシングレポートを用いて処方医へ共有した．薬局薬剤師は患者へ遺伝子検査結果を説明し，遺伝子型に応じた生活習慣と服薬の指導を行った．遺伝子検査時と結果説明1か月後に動脈硬化の再発予防に関する生活習慣，飲み忘れ回数と遺伝子検査への意識に関するアンケートを実施した．さらに抗血小板薬の処方変更率を調査した．なお本研究は昭和医科大学における人を対象とする研究等に関する倫理委員会により承認を受けて実施した(承認番号:2025-0024)．

【結果及び考察】

同意取得した15名のうち14名のCYP2C19遺伝子検査結果が得られた．CYP2C19表現型はNormal Metabolizer (NM) 5名 (35.7%),Intermediate Metabolizer (IM) 8名 (57.1%)，Poor Metabolizer (PM) 1名 (7.2%) であった．IM/PM群での抗血小板薬の処方変更率は77.8% (7名/9名) であった．生活習慣の意識は高く,検査後も良好な意識が維持された．IM/PM群では，食事3項目(塩分,脂質，総エネルギー) の合計点数は高得点側へ分布がシフトする傾向がみられ，服薬忘れのある患者の減少がみられた (44.4% vs11.1%)．NM群は生活習慣の意識に大きな変化はみられなかった一方，服薬アドヒアランスの低下がみられた．特に薬効減弱が懸念されるIM/PM群において食生活や服薬アドヒアランスの改善を促した可能性が示された．今後理解度に応じた説明やNM群へ服薬順守の指導を強化し，薬局薬剤師による薬物代謝酵素遺伝子型情報の取り扱いと効果的な治療支援体制や医療者間での協力体制についてさらなる検証が必要と考えられる．

【キーワード】

クロピドグレル,CYP2C19遺伝子学情報,薬局薬剤師,生活習慣

以上